

心 臟 譜

K O 生

ほんとに嘘のやうだ、あんちにザア〜降てたよんべから今朝への雨が今はカラリと晴れて樅の裏葉をかへす陽の光がまぶしく照る。遠地の山が濃いコハルトの中にクツキリ浮み出てその渡る風にサンマアの香が漂ふて居る。

自分の室の小窓から私は首を突き出して浸潤の世界を見渡した。新築校舎のあたりから作業の音がこんがらがつて聞へる。其響が綺麗に澄み切つた空に波紋を生じて雲のあかたへ流れてゆく、下の小道を郵便夫が右の手ばかりを振り〜のぼつて来る、氣持よい初夏の精を吸ひながら。

『なせ、私達に翼を呉れなかつたのだらう？』今やさしく大空を翔け巡る鳩を見て私は造物主の不公平を恨んだ又それといつしよに緑の若葉を憎んだ、さも愉快げにジー〜音を立て、養分を宇宙から盗んで居るきざな若葉を。そしてつく〜生

の倦怠が私の頭をしびれさせた時、正午の法鐘が何物かを壓へるやうに鳴つた。それと同時に私の唇が綻びて微かな笑が漏れた、小首をかしげてチツと聴くと私の心臓がコト〜音を立てながらこんちことを謂て居た。

『ヘン雨後の若葉が何んだ、阿奴には信が無い、己には宗教もある。鳩だつて放縦癖に喧嘩ばかりして居やがる、己には信智が瀰り自由が設けられてある、怎うしても己は偉いな。』

私はヒタと小膝を打つて再び微笑るまずには居られなかつた。

